東アジアにおける戦争、グローバリゼーションと移民女性の性的搾取

＊本文章は2005年6月19日から24日、韓国ソウルの梨花女子大学で行われた第9回世界女性学大会におけるアジア現代女性史研究会主催のパネル・セッションで発表された。

開会の挨拶

藤目（ふじめ） ゆき

こんにちは。パネル「東アジアにおける戦争、グローバリゼーションと移民女性の性的搾取」を開きたいと思います。

ご存じのとおり、グローバリゼーションのもとで、多数の女性たちが国境を越えて移住し、性産業に働いています。東アジアで移住女性を迎え入れる主な受入国は日本と韓国であり、主な送出国はフィリピンやタイなどの東南アジアの国々と、ロシアやモンゴル・中国東北部など北東アジアの国々です。日本への移住女性の流入は1980年代末から増え、韓国では1990年代後半に移住女性が増えてきました。近年の日本と韓国の米軍基地周辺その他の歓楽街には、日本人・韓国人の女性はもとより、フィリピンやロシアの女性たちの姿が目立ちます。

私たちのパネルがめざすのは、このようなグローバリゼーションと移民女性に対する性的搾取という問題を、第三世界の女性の視点から考察し、新しいフェミニストの国際連帯を構築する手がかりを発見することです。

第三世界の女性の視点は私たちに必要不可欠です。1980年代には黒人女性解放運動の側から欧米フェミニストに対して第三世界と労働者階級の女性を無視した白人中産階級中心主義・「帝国のフェミニズム」(imperial feminism)への批判が提起されましたが、アジアの女性もまた、第三世界の女性の視点を確立しなければ同様の問題に陥るでしょう。特に米国が、韓国や日本に駐留する米軍と韓国軍・日本軍を「グローバルな対テロ戦争」へと動員している今日、対テロ戦争の攻撃を受ける第三世界の側から問題を見ることは急務になっています。韓国や日本にある基地村での性暴力・性売買の問題は、アフガニスタンやイラク、そしてフィリピンの女性が被っている性暴力・性的搾取の問題とつながっているからです。

フェミニストは今日の国際的人身売買禁止運動が米国ブッシュ政権のイニシアティブで推進されていることに警戒心を抱くべきです。ブッシュ政権は人身売買を「現代の奴隷制」と呼び「特殊な悪」と罵倒し、世界正義の擁護者のごとく内外に「悪」と戦う決意を表明し、「人身売買に対する戦争」を声明してきました。が、人身売買と性的搾取の拡大の背景には、米国が主導する資本主義グローバ

リゼーションと対テロ戦争の世界化が進行しています。米国が人身売買との戦いを内外に打ち出して以後の四年間、女性の商業的性搾取は地球規模で増大し、たいてい米国はその傾向を阻止しているのではなく駆り立ててきました。経済と戦争のグローバリゼーションの生み出した女性の経済的苦境は無数の女性を性売買や人身売買へと追い立てていますが、ブッシュ政権の悪と戦うという扇情的レトリックの影に彼女たちの経済的苦境は隠されています。ブッシュ政権は売春禁止主義アプローチを世界におしつけ、売春から女性を強制的にひきはがす団体や機関に優先的にファンドを与える一方、売春の場にいる女性自身が自らの問題に自ら取り組むような諸団体や彼女たちを支援する諸団体を排除しています。彼女たちへの政府や警察からの迫害は強まっています。米国流の「人身売買との戦い」なるものや米国と結びついたアジアの各国政権が米国国務省の評価に慌てて制定する人身売買禁止法によって問題が解決できると信じることはできません。

私たちは、このパネルを通じて、受入国と送出国双方の女性たちの対話と協力によって新しい運動の方向性を模索し、新たなアジアの女性連帯の手がかりを見つけたいと念じています。

（1）鄭喜鎮（韓国・西江大学校講師）「グローバリゼーションと韓国の基地村における性売買」
今日の韓国・基地村における移住女性の増大は、東アジアにおける資本主義グローバリゼーションと戦争が女性に与えるインパクトを集中的に表現しています。鄭喜鎮の報告は、グローバリゼーションがもたらした性売買の状況変化によって先進資本主義国のフェミニストの認識が再考されるべき時期に来ていることを明らかにするでしょう。

（2）今岡良子（大阪外国語大学助教授）「モンゴルにおける都市及び海外流出と性売買」
基地村、また基地村以外の韓国の都市にも日本にも、ロシア・モンゴルといった北方の旧社会主義国からの女性移民が目立つようになりました。今岡良子は、かつて遊牧を基幹産業とする社会主義国家であったモンゴル国において、資本主義への移行とグローバリゼーションの中でいかに性産業が発展し、女性が都市と海外へ押し出されてゆくようになったかを報告します。

（3）アガリン・サラ長瀬（KAFINセンター）「アジアの女性売買と闘う：フィリピンのからの挑戦」
アガリン・サラ長瀬は長く続いているフィリピンの内戦を経験してきました。彼女もミンダナオ島における虐殺事件のサバイバーです。また８年にわたり日本に在住し、苦難の中にある滞日フィリピン女性を支援する活動をしています。フィリピンと日本を往来し両方の経験をもつアガリンの報告は、私たち全員にとって貴重なパースペクティブを与えてくれるでしょう。

（4）藤目ゆき（大阪外国語大学助教授）「アジアにおける軍事主義と売春禁止主義」
私は、コーディネーター兼パネリストの一人として、終わりにもう一度発言します。
従来女性団体の性売買問題に対するアプローチの主流は性売買を法的に禁止して社会から除去しようとする禁止主義でしたが、私はこのアプローチに異論があります。性売買をめぐる日韓とタイ、フィリピンの女性運動を比較して、オルタナティブを考えることができれば、と思っています。